

## 図書館資料としての写真の意義

梶沢 朋美

図書館において写真は視聴覚資料の一つとして見なされている。また、地域・郷土資料としての価値も持つとされている。地域資料としての写真を所蔵する図書館は少なくない。しかしながら、写真のデジタル化、目録の作成など写真資料の活用を行っている図書館は少数である。即ち写真は図書館資料として認識されているにもかかわらず、十分に活用されていない、認識と実態が乖離した状況であると言える。

本研究では、写真資料に対する図書館の認識と図書館における写真資料運用の実態に乖離が生じた原因を明らかにし、公共図書館における図書館資料としての写真の意義について考察していく。

調査方法として文献調査と訪問調査を行う。文献調査では日本とアメリカの図書館界における写真資料への言及を調査し、写真資料に対する認識を明らかにした。日本については明治時代から現在までに刊行された図書を対象に調査し、アメリカについてはアメリカ図書館協会の機関誌である *Library Journal* を対象に調査した。訪問調査では、対象とした図書館に半構造化インタビュー調査を行い、写真資料の現状を明らかにした。調査対象は台東区立中央図書館、中央区立京橋図書館、小平市立喜平図書館、小平市立上宿図書館、日野市立中央図書館の5館である。

文献調査の結果、日本においては大正時代より図書館資料として写真が言及されており、当時の写真資料の性質には郷土資料と児童室の展示写真があった。初期の写真資料は欧米の影響を強く受けたものであった。日本では1960年代に視聴覚郷土資料という概念が提示された後は、写真は郷土資料としての価値が言及されることが多くなっていった。美術参考資料としての写真が注目されていたアメリカとは異なっている。

訪問調査の結果、写真資料は地域資料の一部として収集されている場合が多い、写真資料は団体利用がほとんどであるということが分かった。写真の収集方法には寄贈、定点撮影、自治体からの移管などの他に、市民の協力を得て現在の風景を撮影していくというものがあつた。また、写真資料の取り扱いは図書館ごとで異なっている点が多かつた。

写真資料に対する認識と実態の乖離が生じた原因としては、予算、人員が限られている故に写真よりも図書にそれらを重点的に配分しているということ、写真資料の運用の方法が確立していないため取り扱いが難しいということが挙げられる。

図書館資料としての写真は視覚的な記録の提供の他に、収集方法においても市民・利用者と図書館を結び付けられるという意義がある。故に写真資料の発展のためには、市民・利用者と図書館が協力して、写真の収集・整理を行う方法の確立が期待される。

(指導教員 白井哲哉)